

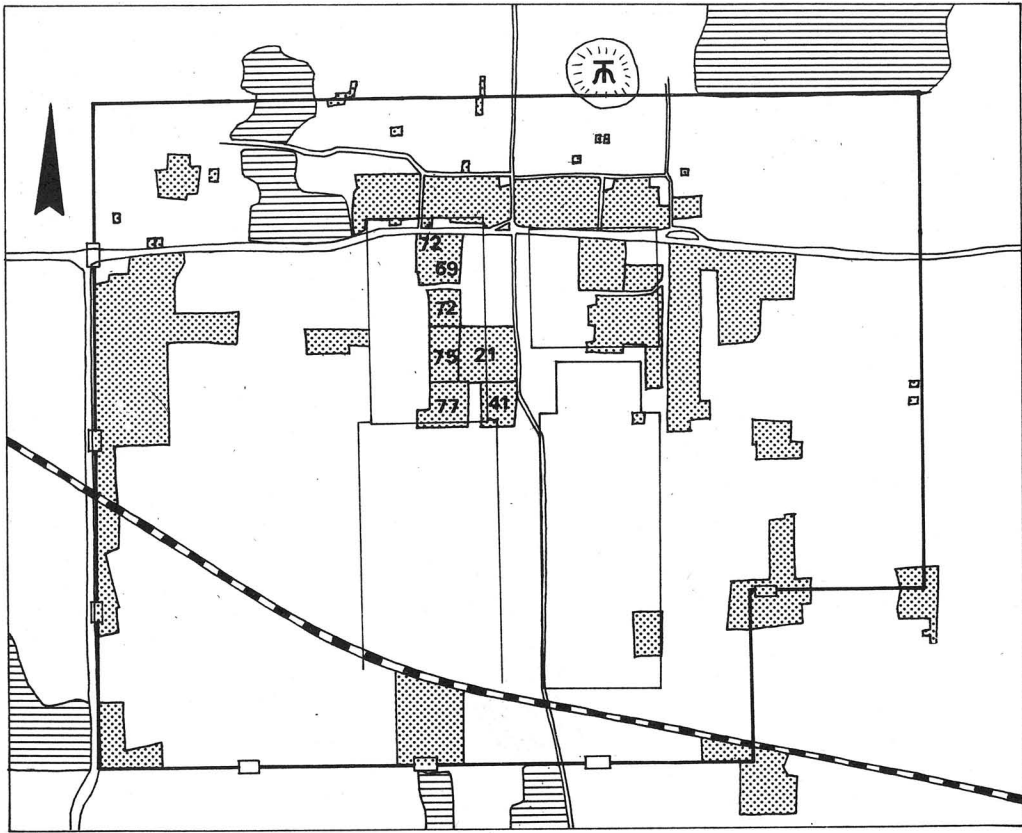
47年度 平城宮跡発掘調査部
発掘調査概報（1）

— 平城宮第75・77次発掘調査 —



昭和48年5月

奈良国立文化財研究所



平城宮発掘調査地区略図

カットは第77次出土鳥形

昭和47年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報(1)

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部は、昭和47年度において、第75・77次の発掘調査をおこなった。このほか、史跡指定地の現状変更にともなう事前の発掘調査を、7ヶ所でおこなった。それらは第1表の通りである。

次 数	調 査 地 区	調 査 面 積	調 査 期 間
75	第 1 次 内 裏	4010 m ²	1972.4.1～1972.6.20
77	第 1 次 大 極 殿	4120	1973.1.13～1973.4.23
79-1	馬 寮 北 方	10	1972.4
79-3	第2次内裏外郭北方	30	1972.6
79-11	馬 寮 北 方	12	1972.10.21～1972.10.25
79-12	第2次内裏外郭北方	126	1973.1
79-4	平 城 宮 東 院	10	
79-7	平 城 宮 東 院	24	1972.8
79-8	平 城 宮 東 院	18	1972.11

第1表 昭和47年度平城宮跡内発掘調査一覧

平城宮第75・77次発掘調査

本年度の調査地域は、推定第1次内裏・大極殿区域の南限にあたり、この付近では1966年以来、すでに4次(27・41・69・72次)に亘る発掘調査をおこなった。それらの調査ならびに本年度の調査をつうじて、この区域は奈良時代に前後大きく3時期の改変が確認された。以下の記述もそれにもとずいておこなう。ただ遺物の大半については現在整理中であり、なお検討を要し、木簡については別の「木簡概報」を参考にされたい。

I 第75次調査

調査地は推定第1次内裏・大極殿区域の東南部にあたり、北辺で第72次、東辺で第27次調査地に接する。

造営以前

平城宮造営以前の遺構として、古墳1基、溝1条がある。古墳(SX7800)は断面V字形の周濠をもつ一辺約11mの方墳である。後に墳丘は削平され基底部のみを残す。周濠からは埴輪が出土した。溝(SD7787)はSX7800の中央を貫通して南北にのびる。幅約1.5mの素掘り溝で造営に際して埋立てられている。下ツ道の東側溝であろう。

A 期

A期に属する遺構として掘立柱建物3棟、溝2条、柵2条がある。SB7780は2間×5間の掘立柱南北棟建物で、桁行10尺、梁行8尺等間、SB7790は2間×3間の掘立柱南北棟建物で、桁行10尺、梁行7尺の等間である。この2棟の建物は24尺を隔てて南北に並んでいる。SB7765は2間×3間の掘立柱東西棟建物である。柱間は8尺であるが、西妻柱列は3間にかんがえられる。SD7142は幅約1mの素掘りの南北溝で、比較的短期間のうちに埋められている。SA3805は東西方向の柵で、9間分を検出したが東は第27次調査地にのびる。柱間はおよそ12尺前後。SA3805の南方14.4mを隔ててSA3818が平行する。南北溝(SD7760)は南方の南面中央門から進入する道路の東側溝である。

B 期

発掘区北半部を土盛り整地し、東西方向の築地(SA3810A)および南面中央門(SB7750A)をつくる。

SB7750Aは南北両面に凝灰岩地覆石の抜取り痕跡(SD7772・7773)をとどめるのみであるが、これによって東西21.0m、南北12.9mの基壇がかんがえられる。南・北面には長さ13.6m、幅1.1mの階段痕跡がある。

築地（SA3810A）は後にSA3810Bによって削平されるが、東西溝（SD7775）は北面の雨落溝である。

C 期

南面中央門築地を改修し、その南北に2条の柵と1条の溝をつくる。南面中央門（SB7750B）は中軸線上にある掘立柱建物で、梁行は9尺2間、桁行は中央間14尺、脇間10尺、端間8尺の規模である。柱掘形は一辺1.1mの隅丸方形で、直径約40cmの柱痕跡をとどめる。ただ棟通りについては掘形はなく、礎石がおかれていた可能性がつよい。築地（SA3810B）がSB7750Bに取付いて東方にのびる。基底幅約2m、高さ50cmをとどめ、赤褐色粘質土を版築によって搗きしめている。南面中央門から東に27.4m離れた位置に間口13尺の脇門（SB7770）をつくる。築地の南北両側には幅約1mの雨落溝がある。南北溝（SD7131）は築地の下を暗渠でぬけ、南にのびる。発掘区の南限に接して東西にのびる柵（SA3740）は15間分を検出したが東方では第27次調査地にのびる。その南に東西溝（SD3769）が平行する。東西柵（SA3809）は築地の北方で発掘区を東西に横断する柵で柱間は20尺である。C期でも時期的に遅れる建物としてSB7765、SB7785がある。SB7765は2間×2間の掘立柱東西棟建物であるが、西妻を3間につくっている。SB7785は2間×3間の掘立柱東西棟建物で、梁行8尺、桁行9尺である。

小 結

以上、検出した遺構のあらましをのべたが、3期のおよその年代は、A期：造営当初からおよそ天平勝宝5年（753）までの時期、B期：天平勝宝末年から宝亀末年（780年頃）、C期：延暦年間から弘仁年間（782～824年頃）とかがえている。

第75次調査地の特色として、恒久的な建造物がきわめて少ないことがあげられる。つまり、B期に造作する南面中央門と築地を除くならば、基本的には広場としての性格がつよい。

Ⅱ 第77次調査

調査地域は第75次調査地に南接し、第41次調査地の西方に位置する。

造営以前

地形は発掘区の北方から南方に向ってゆるやかに傾斜し、黄色粘土や黒色粘土からなる地山は発掘区の北限から南限までの6.8m間で80cm下降している。発掘区の南半部ではアシなどの植物遺体を混える黒色粘土層が展開し、湿地の状況を呈する。この層位には6世紀末から8世紀初頭にかけての土器細片や木材の削屑を含む。この地域の南北中軸線の東方1.5mの位置に南北溝(SD7821)があり、第16・17・75次調査で検出した下ツ道東側溝に相当する。掘立柱の小建物(SB7817・7816)もほぼこの時期に存在するのであろう。

平城宮造営に際しては、地山上面に黄褐色のバラス混り土を敷いて整地する。整地土の厚さは北半部では15cm前後、南半部の厚い部分で30cmを計る。整地土の上に構築される奈良時代の遺構は大きくA・B・C期にわかれ、さらにA期はA₁・A₂・A₃の小期に区別することができる。

A₁ 期

南面中央門(SB7801)とその両翼にとりつく回廊の南縁は耕作のため著しく削りとられているが、旧規模の確認が全く不可能ではない。

SB7801は東西31m、南北17.2mの掘込み地業をおこない、保存の良い部分では遺構検出面から1mの深さがある。掘込み地業に際しては、掘形の周縁あるいは中央部分に栗石詰め盲暗渠をめぐらし、底に粗く栗石をならべる。上部は版築で搗き固めるのであるが、5層に大別でき、各層はさらに3～4層の細別が可能、きわめて強固である。版築積みの各辺を少し削って東西28.5m、南北16.8mの基壇を築成する。周囲に凝灰岩の散布がみられ、本来は壇上積基壇であつたらしい。北面中央に長さ15.4m、幅70cmにわたって凝灰岩片があり、階段とかんがえられる。

基壇上面は削平され、礎石据付けの根石などはない。基壇の規模から、5間×2間、15尺等間程度の門が想定できる。

SC5600・SC7820も基壇築成に際して掘込み地業をおこなっている。幅11m、北辺では遺構検出面から50～70cmの深さに版築がみとめられるが、南辺ではいくらか深い。版築は門に比して粗雑であり、4～5層にわかれるが軟質である。門の東で5m、西では4m離れた位置に門の場合と同様の盲暗渠(SD7807・SD7808)をつくる。SD5600の基壇上面には礎石据付けの、栗石を用いた根石が残存する。それによれば、梁行24尺、桁行15尺となり、7間分を検出した。ただし、門への取付き部分と北側柱列のSB7802に重複する部分では柱位置を確認できなかった。梁間中央に築地をとまなういわゆる築地回廊に想定しうるのであるが、築地痕跡は見出せなかった。北側柱列の外側、1.5mを隔てて地覆石の抜取痕跡があり、門と同様壇上積基壇がかんがえられる。SC5600が門に接する付近の基壇上面に、南北両面の地覆石据付け溝で結ばれる2条の南北溝(SX7814)がある。脇門の施設である可能性がつよい。基壇の南北縁には、素掘り溝を掘り拳大の礫を詰め、その上部にも20cm前後積上げる(SD5557、SD5565、SD7811)。暗渠による排水と基壇化粧とを兼ねたのであろう。北面の保存のよい部分ではSD5557の外側に大粒のバラスを約50cm幅で敷き雨落溝(SD7813)をつくる。その外側は間疎なバラス敷面になって北方に広がる。

A₂ 期

南面中央門(SB7801)はA₁期の規模をほぼ踏襲、ただ階段の出が1.5mに拡張している。

回廊基壇(SC5600、SC7820)も基本的に変化しないが、SC5600には新に建物(SB7802)が増築される。SB7802は門基壇の東、17m離れた地点から東西25.5m、南北8mの範囲で基壇を北側に拡張してつくられる。桁行5間(15尺等間)、梁行3間(13尺等間)の東西棟総柱建物、東妻柱の1柱を除く四面は掘立柱とし、内部を礎石柱とする。柱掘形

は 3.5×3 m、深さ 3 m 前後の長方形を呈し、大形の柱抜取痕跡をともなう。北側柱の 1 穴に柱根をとどめるが、それは直径約 75 cm の丸柱で、下端の木口に根がらみを受ける溝を彫り、基部には上下 2 段の柄穴を貫通させ、下段には両側から挿入した角材が残る。柱掘形の対角線上に角材を配し柱を支えたようである。なお、柱を抜取る際に切断した角材が数穴の掘形に認められる。東妻柱の 1 穴は他と同様に掘形をつくるが、上面から厚さ 70 cm にわたって強固な版築地業を施しており、礎石柱に変更されているようである。内部では 1 辺 2 m 前後の浅い礎石据付け掘形を掘り、その中心に栗石を用いた根石をとどめる。こうした柱位置の状況から楼風の上部構造が推測される。

SB7801 から SB7802 にかけての北辺には礫が敷詰められる。この石敷は基壇縁から直接はじまり、雨落溝などの施設はない。

回廊の心から 20 m 北方に東西溝 (SD5590A) がある。さきにおこなわれた第 41 次調査によって、この溝に集結する雨水は巨大な木樋暗渠に導かれて東面回廊外に排水されることが判明している。

A₃ 期

この時期の南面中央門 (SB7801) は規模をやや縮少し、東西 27.2 m、南北 16.4 m の基壇となる。回廊 (SC5600、SC7820) と楼風建物 (SB7802) は存続。しかし、建物の北方をめぐる礫敷は厚さ 20 cm 程度の砂質土で埋立てられ、その上にバラスを敷く。また門・回廊基壇の外縁に拳大の礫を一行に並べ、その内側 50 cm の幅で少しく大粒のバラスを敷く雨落溝をめぐらしている。雨落溝は門の北面階段の両端付近で北上し、SD5590B に注ぐ。SD5590B は A₂ 期の溝を拡張したものである。

門の北面階段の幅で北進する範囲のバラスは比較的大形で、中軸線から 7 m 東寄りに南北溝 (SD7760) があり、北進する道路と東側溝であろう。

B 期

この時期に属する遺構は発掘区内には存在しない。

C 期

掘立柱建物 2 棟、柵 1 条がこの時期に属する。中軸線上に位置する東西棟

建物（SB7803）は、東半分しか検出しなかったが、桁行7間、梁行4間の規模が想定できる。柱間は隅の間が12尺と広く、他は10尺である。内の柱痕跡を欠くが、おそらく5間×2間の礎石による身舎が存在したのであろう。また柱位置の周囲に3.5m前後の間隔をおいて小穴があり、足場用柱穴とかんがえられる。

SB7803の北側に東西方向にのびる小柱穴の柵（SA7815）がある。柱間17尺で10間分検出したが、まだ東西にのびるようである。SA7815の北7mを隔てて掘立柱建物（SB7753）がある。小柱穴の2間×2間、6尺等間の小屋。

遺 物

造営前の旧地面からは、6世紀から8世紀初頭に至る土器細片が発見され、整地土や基壇土には埴輪片が混入していた。

A₃期に廃絶するSD5590Bやそれ以南のバラス敷にはおびただしく瓦片が堆積し、南面の構築物の廃絶状況をとどめている。SB7802の柱抜取痕跡からは灰などに混って瓦・土器・木器・木簡などが出土した。

軒瓦の文様からすれば、軒丸瓦では6284・6304型式がそれぞれ46.3%と26.1%を占め、軒平瓦では6664型式が64.3%を占めている。この状況は第69・72・75次調査とは様相を異にするものである（付表参照）。

土師器・須恵器では天平末年よりもやや遅れる技法を示している。また、SB7802の柱抜取痕跡からは、唐代華南地方でつくられたらしい暗緑褐色釉を施す陶器片が出土している。

木器として、人形・形代・曲物・しゃもじなどがある。そのうちタカをかたどった形代（表紙カット）や裸形の男子をあらわす人形は珍しいものである。

木簡は総数243点出土した。多くは衛門府に勤番する衛士に関するもの、門の出入を監視した記録のようである。また「大殿」、「御輿人」などこの区域の性格をうかがいうるものもある。年紀のある木簡も出土しており、それによると天平勝宝5年正月の記録類が中心のようである。この木簡からA₃

期の廃絶が753年に近い時点にあることがわかる。

小 結

以上のような第77次の発掘調査によって、この区域には、A期とC期の遺構があり、B期の遺構がないことが明らかになった。C期の遺構であるSB7803は奈良時代末期から平安時代初期に属するこの区域の中心建物であるが、それ以前には主要な殿舎は存在しない。そうしたことから従来の第1次内裏・大極殿区域のかんがえ方は基本的に改めねばならないこととなった。

Ⅲ 推定第1次内裏・大極殿地域の変遷

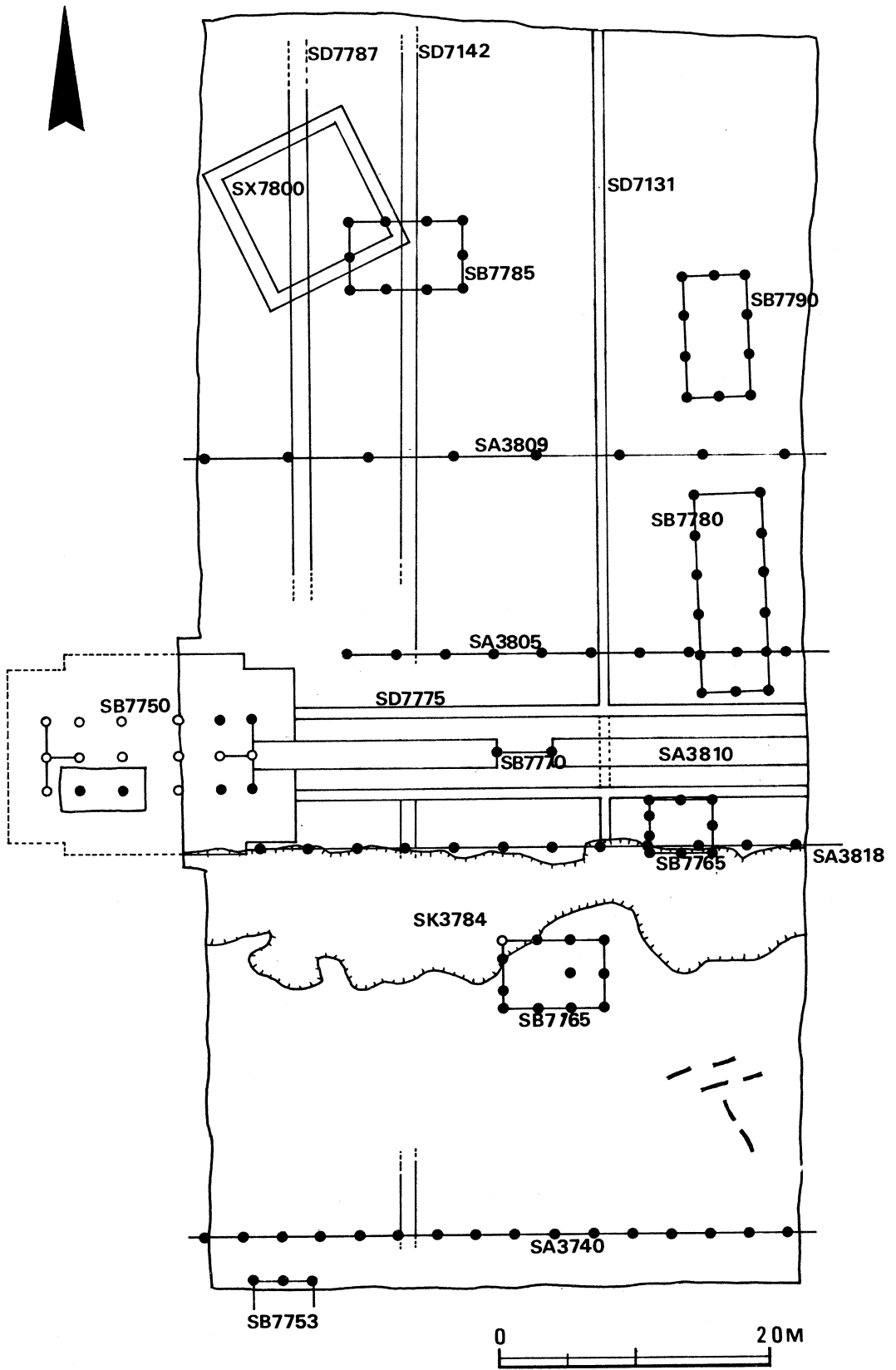
1966年から1973年まで、平城宮の中心区域で第27、41、69、72、75、77次の6次にわたる調査をおこなってきた。調査の成果にもとずき地域の東半部の状況はほぼ明らかになり全域をA・B・Cの3時期に区分することが可能となった。以下、その時期別の状況を概括することにしてしよう。

A期：藤原宮から遷都した当初の時期からはじまる。この地域は東西600尺、南北1080尺の長方形の平面に区画され、外周に回廊をめぐらす。南面中央には門(SB7801)をおき、南北長を3分する最後方の幅360尺の一郭を台状につくり、そこに巨大なSB7200を中心とする建物群を構築したようである。建物群と南面中央門との間には一時的な建物は存在するが、基本的には広場であった。後方の建物群区では前後2小期の区別が可能であり、南面では3小期にわかつことができる。とくに南面ではA₂期に楼風建物(SB7802)を増築し、この地域の偉観を増加している。A期の終末は出土木簡によって、天平勝宝5・6年(753・754)にかんがえられる。

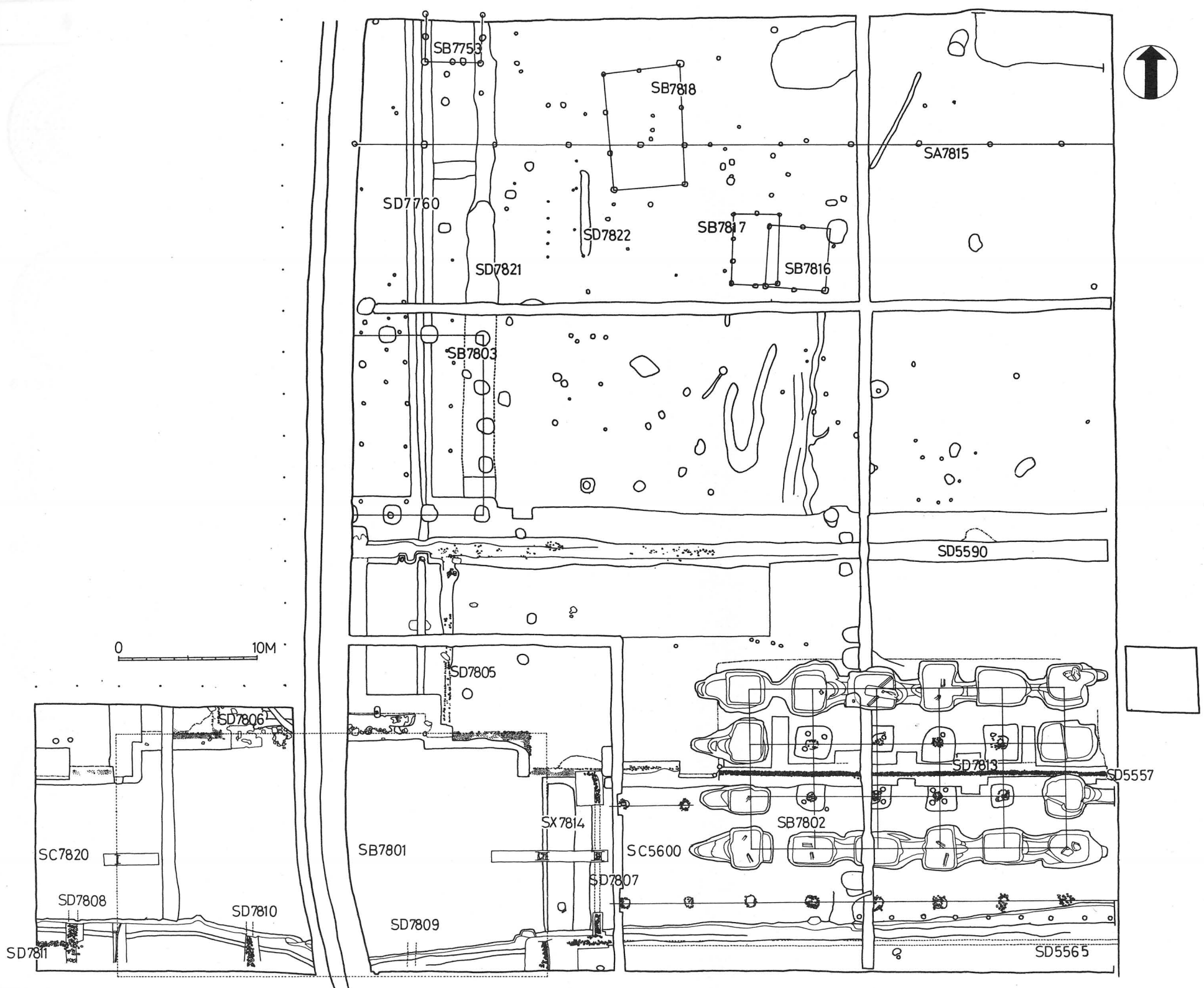
B期：A期の南面回廊は350尺後退し、約600尺四方の正方形区画に築地をめぐらす。中軸線上の南面に門(SB7750A)を開く。後方の台状区は前面に拡張され、SB7150を中心にその脇に数棟の建物を配する。それらは10尺方眼の計画線にもとずいて建設されたものである。この時期も前

後2期の小期に区別できるが、その下限は出土の土器・瓦などから宝亀末年（780）におかれる。

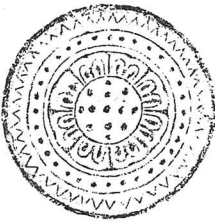

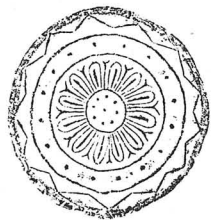

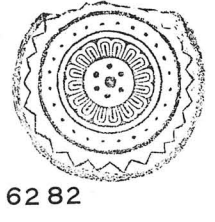

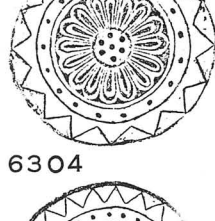

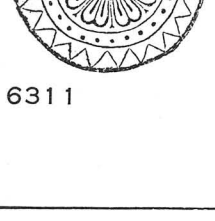





C期：この時期にはB期の築地を踏襲するが、内部の殿舎配置はまったくB期と様相を異にする。すなわち、後方の建物群はいわゆる内裏の建物配置に改変され、南門外には別種の建物（大極殿？）をつくる。この時期の下限は出土の土器から弘仁末・天長初年（824年頃）にかんがえられ、桓武帝・平城上皇の内裏とかんがえられる。

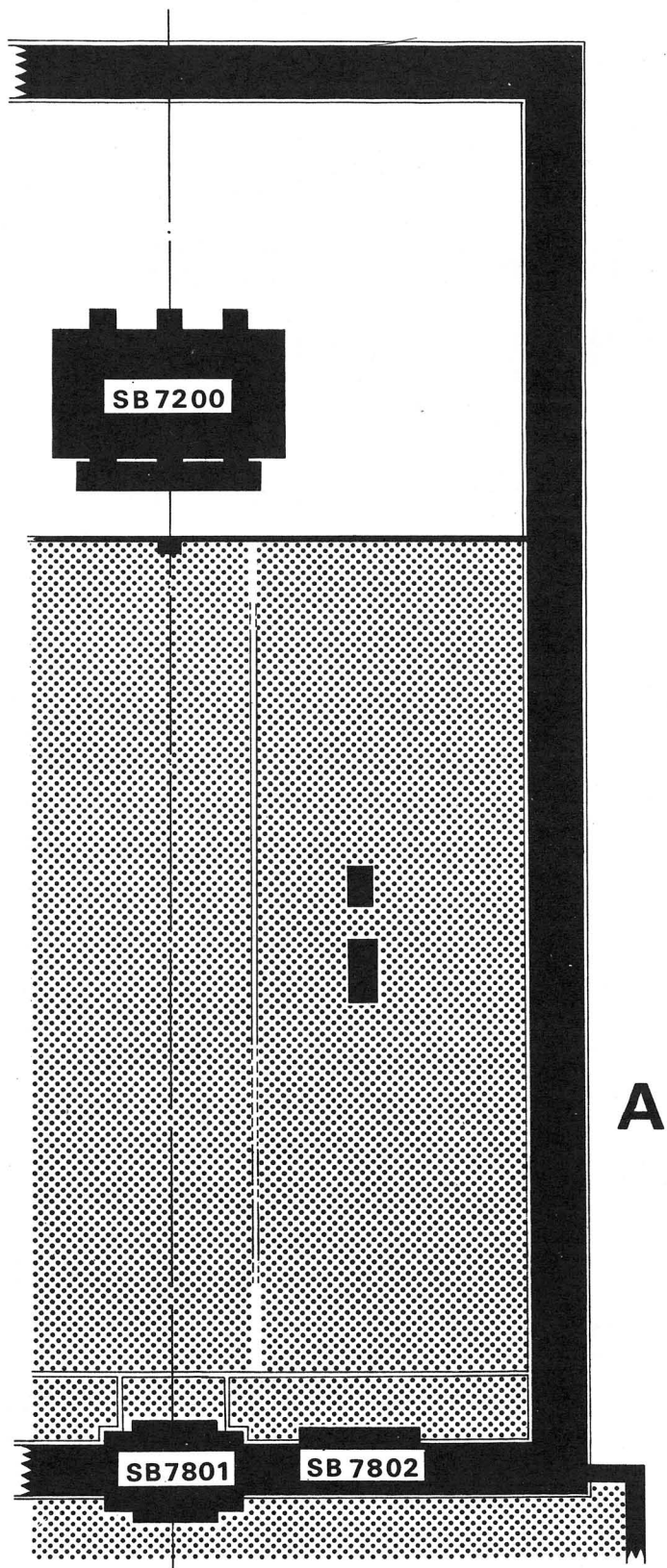


平城宮跡第75次発掘遺構配置図

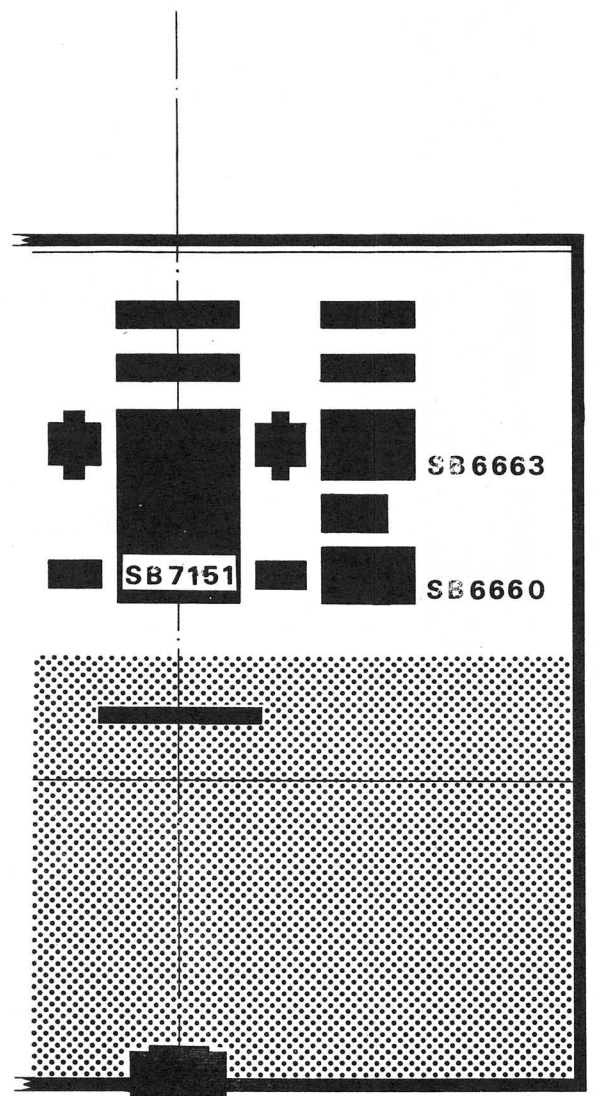


平城宮跡第77次発掘遺構配置図

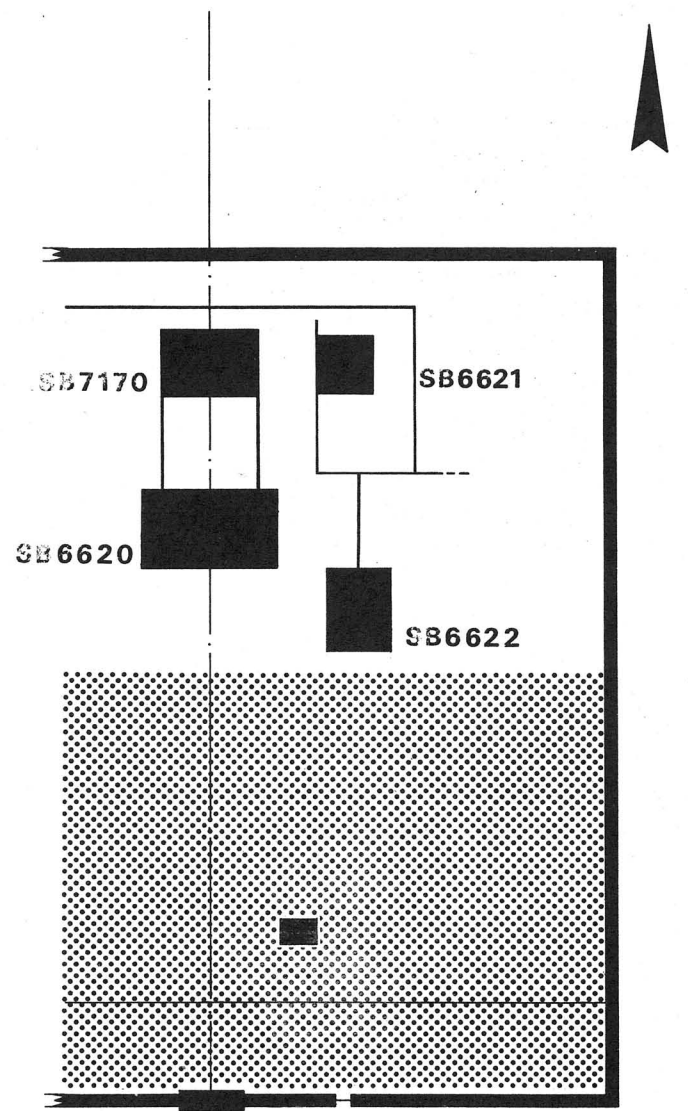
軒丸瓦型式		69.72次	75次	77次	軒平瓦型式		69.72次	75次	77次
		1.4%	4.1%	0.7%			0.0%	.5%	0.7%
	6133	16.1	10.2	2.2	6663		1.4	14.9	6.5
		21.3	10.2	0.0			3.5	1.5	22.5
6134		2.2	7.1	5.2	6664C		18.9	4.5	41.8
		31.6	15.3	4.5			0.0	.0	10.5
	6225	9.5	0.0	46.3	6664		1.4	20.9	5.2
		0.7	1.0	26.1			14.5	11.9	1.3
6282		6.0	11.2	0.7	6668		24.8	14.9	1.3
		0.0	14.3	6.7			29.7	3.0	.
	6284				6685				
									
6304					6691				
									
	6308				6721				
									
6311					6732				
	6313								
出土総個体数		137	98	134	出土総個体数		161	67	153



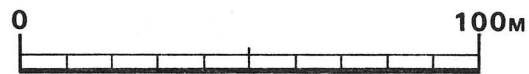
A



B



C



推定第1次内裏・大極殿殿舎変遷図